

『インフォームド・コンセント——日本に馴染む六つの提言』

(丸善ライブラリー、一九九七年)

中川 久嗣

近年になって、わが国でも医療の現場において医師と患者のコミュニケーションの必要性が注目されるようになり、これまでのパターナリズムではなく、医師による説明とそれに対する患者の側からの同意が広く求められるようになってきた。医師のパターナリズムとは、「前時代の医師のプライド」である。すなわち、わかりやすく言ってしまうと、医師が患者の治療については全権を握り、患者が医師に説明を求めたり要望を伝えるなどでもない、患者は医師の言うことを聞いて従っておればよいのだ、とする考え方や態度のことである。確かに最近になってインフォームド・コンセントの考え方が、医師にも患者にも行き渡り始めようとしつつあるせいとか、病院でも物腰柔らかくこちら（患者）に丁寧な説明をしてくれる医師が増えてきたように感じる。時にはこちらがかしこまるほど丁寧で親切に説明してくれる医師もいる。

しかしそれでも、医師—患者関係は、現実には依然として前時代

的なままであって、あいかわらず一方的に物事を運んで「御高診」下さる先生や、何か言うと不機嫌になる先生もおられる。医師にとつては患者はまだまだ「お客様」ではなくて、何も知らない無知蒙昧な、自分を頼ってくる民衆たち、と映っているらしい。評者も前にストレス性の胃腸病で、ある大病院に長いこと通院したことがあるが、ある日主治医のK医師に「こんなに長い間このクスリを飲み続けていて、大丈夫なんでしょうか？」と聞いたら、とたんに先生は機嫌を悪くして「そんなにいやならやめればいいじゃないですか！」と言い放つたことがあった。それ以来、その医師の診察日ややって来るたびに緊張とストレスで下痢が悪化し、とうとう別の大病院に変えた。そのK医師は『県内名医名鑑』の類に名前が掲載されているくらいの名医らしいが、その『名鑑』に載っている彼の「医師からのアドバイス」の欄には「患者さんは担当医とよく話し合つて、治療の方針を決めてゆくことが大切です云々」と書いてあっ

て呆れた。

インフォームド・コンセントは、この著作にもある通り、アメリカから入ってきた外来の概念である（それがどのような概念で、またどのような歴史をたどってきたものなのか、ということについての説明は、この著作には大変に詳しく書かれている）。わが国においては、この概念はまだまだあくまでも理念にとどまり、本音の部分では、医師と患者の関係は一方通行の域を出ない。そこには星野氏も言うように、日本的な国民性と気質があつて、このような日本のシステムが、度重なる医療事故や薬害を起こす土壌になつてきたのである。薬害エイズの被害者たちは、信頼していた医師から、何の説明もなくHIVウイルスを体内に注射された。危険性を指摘したり、やめてほしいと頼んでも「安全だ」の一点張り、半ば問答無用の形で汚染血液製剤を注射されたケースさえあるという。

さて、医師たちが尊重するのは、患者本人の意思ではなく、むしろ家族の意思である。星野氏は、日本人の精神風土と家族主義の持つ暖かい面とともに、それがかえつて患者個人の意思の決定と表明ということに対する意識の育成を阻んでいる面があると指摘する。しかし、そこに例えばアメリカ流の明確な強い個人主義を導入することの難しさも同じように指摘される。それゆえに、副題にもあるように「日本に馴染む」形で、インフォームド・コンセントなどの生命倫理の諸原則を導入してゆく方法が模索されるわけである。つまり「それらの基本的価値を変えずに、日本人の国民感情に馴染むように適度の改良をすること」（二六八頁）が重要なのである。星野氏の提言は「患者が知りたいかどうかのアンケート方式」、肩の張らない「病状説明」の方法、「診療パスポート・薬ノート」の作成、

「患者中心のインフォームド・コンセントの集い」の開催、「患者が作成する同意書」の必要性、など具体的な内容のものである。この中で、例えば「薬ノート」などは、最近あちこちの病院や薬局などでも、薬名薬効や副作用などが書かれた説明書を出すようになっていいる。われわれ患者の方もそうした説明書を受け取るだけではなく、積極的に自分でも記録をつけるような努力も必要であらう。要は患者の側も、それなりの努力を怠つてはいけないということだ。インフォームド・コンセントも、医師の側だけにその実行が求められがちであるが、それでは患者はあいても変わらずただ受け身で診察室に座っているだけであつて、その意味では従来のパターナリズムの場合と同じである。インフォームド・コンセントは医師と患者の双方に、その実践が求められるものなのだ。患者もただ単に医師に要求を突きつけ、大きな顔をすればよいというものでもない。双方がお互いの立場を尊重しつつ、うまく情報と同意を引き出し合うことが肝要である。ただしこれは言うは易し行は難しであることに変わりはない。星野氏の提言は、そのあたりのことを、文字どおり日本人でも「肩を張らず」にうまくやつてゆけるように考えられていて、具体的に比較的誰にでも実行可能な内容のものとなつているのである。